# A Reprint of Teisou-onna-hachikensi Vol.2


| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2018-06-25<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 高木, 元<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6543 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

大妻女子大学紀要―文系―　第五十号、平成三十（二〇一八）年三月

# 『貞操婦女八賢誌』――解題と翻刻――（二）

髙木　元

【キーワード】　南総里見八犬伝、為永春水、二代目為永春水、人情本、稗史もの中本

前号に引き続き、『南総里見八犬伝』の派生作である『貞操婦女八賢誌』初輯下帙を紹介する。

本作の作者である初代と二代の為永春水に限らず、十九世紀における戯作者たちにとっての『八犬伝』体験は、ジャンルを越えて実に大きな影響力を持っていた。周知の通り、『八犬伝』は文化十一（一八一四）年～天保十三（一八四二）年に至る二十八年間を費やして完結した長編史伝もの読本の雄である。主として貸本屋を通じて読み継がれたため、読者の評判の良さに拠って長編化した側面も否定できないが、その堅固な基本的小説構想が備わっていた故に、破綻のない長編作を紡ぎ出すことが可能であったものと思われる。

原作が完結する以前から歌舞伎に脚色され上演されたのみならず、草双紙など実に多くの〈八犬伝もの〉が、原作が結局する前から産みだされていた。この現象は、とりもなおさず『八犬伝』人気に支えられた商品価値が、継続的に保たれていたことを意味する。本作も完結前に出された派生作の一つであった。

そもそも、『八犬伝』というテキストは長編大作であるが故に抄録（ダイジェスト）されるのは当然のことであった。その場合、所謂名場面を繋ぐ形式が採用される傾向にあるが、実は改作（リメイク）の場合であっても、比較的原作の構成や展開に即して翻案されてことが多かった。改作に際して採用される『八犬伝』の要素は、〈世界〉と呼んでも差し支えのない全体構想と、〈趣向〉とも称すべき名場面に係わるエピソードであった。

現代の小説や漫画などにおいては、ジャンルを超えたメディアミックスが一般化しているが、『八犬伝』の享受史を顧みた時、『八犬伝』は逸早く、原作の刊行途中からメディアミックス化され続けてきたことは刮目に値する。そして近世期のみならず現代に至るまで、古典に基づくテキストとしては突出した点数に及ぶ改作翻案作が創作され続けているのである。

さて、今回紹介した初輯下帙は、主として原作の〈大塚の場〉から〈円塚山の場〉に基づいた部分である。討つべき敵として扇谷が設定され、原作の「村雨丸」に対応するのが豊島家伝来の「錦の御簇」、寂寞道人こと犬山道節が円塚山にて「火定」を実施して愚民を騙し軍資金を獲る場面は、神卜仙女真弓こと於道が湯ヶ嶋にて「湯花の法筵」を催し熱湯の中へ飛び込むという趣向に変えられている。また、於道が「錦の御簇」の来歴として「蜀紅錦」に関する蘊蓄を披露する場など、江戸読本風の考証をも書き込んでいる。

なお、作中の「扇ヶ谷」を「合ヶ谷」に、「大塚」を「多塚」にと、板木が彫られた後から象嵌して訂正してある。「本郷」も全部ではないが「本幸」と直されている。「湯ヶ島」は「湯島」を匂わせているのかもしれぬが、豊嶋や礫川、戸田などは実在の地名を用いており、「扇ヶ谷」「大塚」「本郷」には何等かの差し障りが存した故の修訂であると想像されるが、その事情に関しては未詳である。

**【書誌】**

**書型** 中本 十八・六×十二・五糎

**表紙** 上部は濃縹、中央にて暈し下げ、下部は水色地。全面に貝殻の意匠を白抜きで散らす。後ろ表紙は柿渋色無地。

**外題** 「貞操婦女八賢誌 二編 上（中下）」（十三・三×二・七糎）。上部は柿色地に花を白抜きにし中央部へ暈かし下げ、下部は水色地に模様を白抜き。表紙とも三巻同一。

**見返** なし〔白〕

**序** 序題なし「文亭綾継」三丁（丁付なし）

**口絵** 第一～三図 見開き三図（丁付なし） 重摺りを施す

**題** 「做水滸意／以古詩意／補半百」（印記）

**内題** 「貞操婦女八賢誌初輯巻之四（～六）」

**尾題** 「貞操婦女八賢誌初輯巻之四（～六） 終」

**編者** 「東都 狂訓亭主人著」（内題下）

**畫工** 「繍像九員英泉畫」（口絵第一図）

**刊記** なし

**諸本** 館山市博・早稲田大・西尾市岩瀬文庫・山口大棲妻・東洋大・東京女子大・三康図書館・千葉市美。

**翻刻** 前号参照

**備考** 後印本では内題尾題等に象嵌して編数を修正したものが見られる。具体的な改修の様相の調査報告については後日を期したい。

**【凡例】**

一 人情本刊行会本などが読みやすさを考慮して本文に大幅な改訂を加えているので、本稿では敢えて手を加えず、可能な限り底本に忠実に翻刻した。

一 変体仮名は平仮名に直したが、助詞に限り「ハ」と記されたものは遺した。

一 近世期に一般的であった異体字も生かした。

一 濁点、半濁点、句読点には手を加えていない。

一 丁移りは「」で示し、各丁裏に限り「1」のごとく丁付を示した。

一 底本は、保存状態の良い善本であると思われる館山市立博物館所蔵本に拠った。

翻刻掲載を許可された館山市立博物館に感謝申し上げます。

**【付記】** 前号の訂正

70頁2行目 隔なく……隔てなく

70頁12行目 婦女を……婦女子を

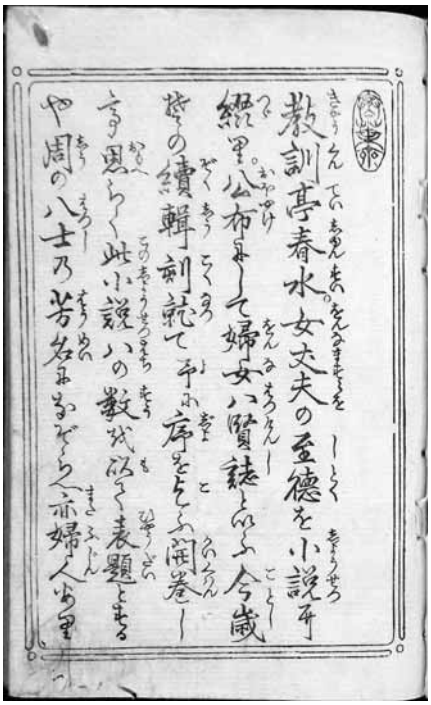
92頁6行目 口上など……口上などゝ

92頁末尾上部 賣弘所

※右は図版を掲載した箇所で汗顔の至りである。謹んで訂正しておきたい。

表紙

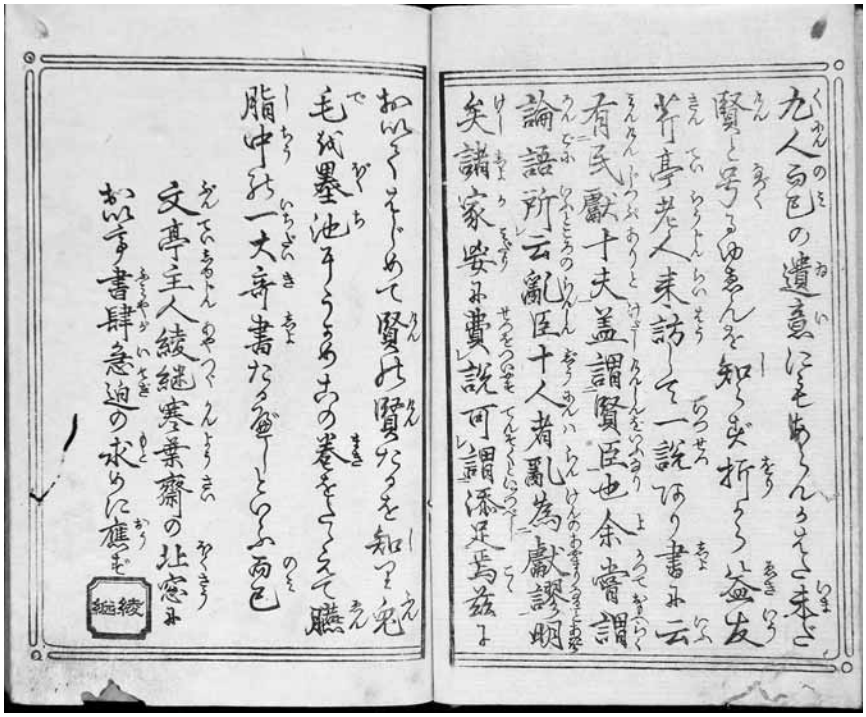
序文



寒葉齋

教訓亭春水。女丈夫の至徳を小説に綴り。公布にして婦女八賢誌といふ今歳その續輯刻就て予に序を乞ふ開巻して思らく此小説八の数を以て表題とするや周の八士の芳名になぞらへ亦婦人あり」九人而已の遺意にもあらんかはた未だ賢と号るゆゑんを知らず折から益友芹亭老人來訪して一説あり 書に云有二民獻十夫一 蓋謂二賢臣一也余嘗 謂 論語所レ云亂臣十人者亂 爲二獻 謬一明矣 諸家 妄に費レ説 可レ謂二添足一焉 茲に」付し丁なし おいてはじめて賢の賢たるを知り兎毛を墨地にうかめこの卷をたゝえて臙脂中の一大奇書たるべしといふ而已

文亭主人綾継寒葉齋の北窓に
おいて書肆急迫の求めに應ず 継綾



【口絵第一図】緒像九員 英泉畫／多塚の梅太郎」付し丁な

於才の尼／
春風にまだ生そふる／わか草の／色や霞に／まがふむさし野

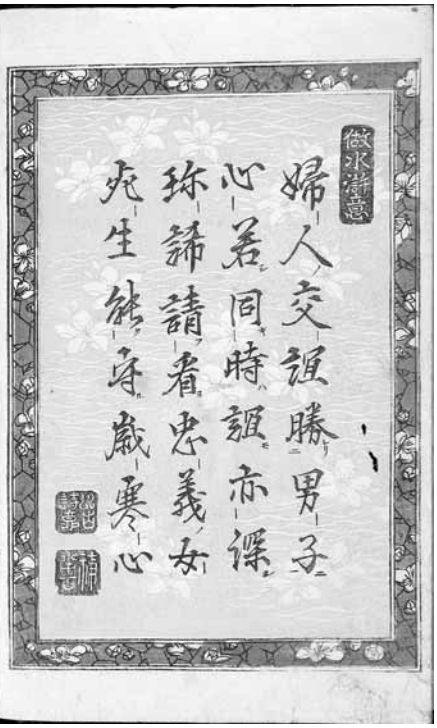
【口絵第二図】仙ト神女眞弓」付しなし

合ヶ谷の婢女八重菊／門すゞみ／ある夜／おとこと／なりに／けり

【口絵第三図】鷺界青山／一株ノ秋／水平ニメ銀浪／接シ天ニ流」付しなし

隅田川／水の／みなかみ／たづねてぞ／夏を／よそなる／月も／見に／ける／文亭主人

【題】




【巻首】

**做水滸意**

婦人ノ交誼　勝レリ男子ニ／心若シ同キ時ハ誼モ亦深シ／珎諦　請フ看ヨ忠義ノ女／死生　能ク守ル歳寒心／

以古詩意　補半百　付し丁なし

婦人の交誼　男子に勝れり／心もし同き時は誼もまた深し／
珍希請ふ看よ忠義の女／死生よく守る歳寒心

# 貞操婦女八賢誌初輯卷之四

東都　狂訓亭主人著

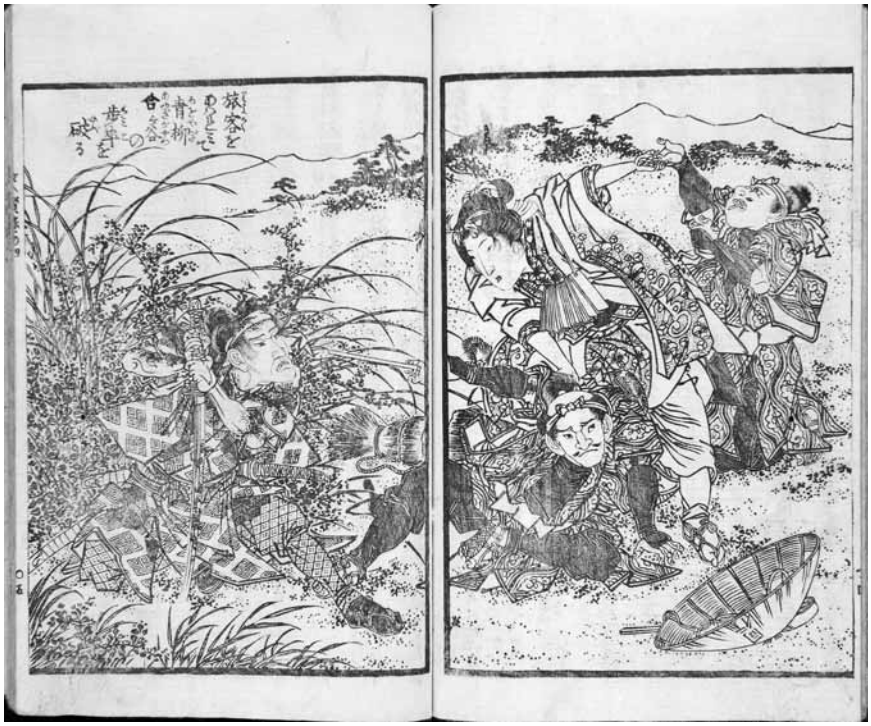
## 第七回

松井田原青柳哀旅客
戸田川舩毒婦謀賢婦

山里にしる人もがな郭公なきぬと聞ば告に來るかに。と詠ぜし哥は貫之の風雅なりけん。それならで此所ハ妙儀の山近く人松井田の野の果に手疵をおひし旅人の刀を杖によろめきつゝ立上りてハ尻居に倒れ息も苦しと夕月夜まばらの星にあらずして山の端ずゑをちら〳〵と越てゆくなる松明を白眼つめて歯をかみしめ漸々に弱り」茂りたる夏艸にこそ打伏ぬ折節に遥の埜路より順礼歌を唱へつゝ往来稀なる荒野ぞとも思はでよぎる人なりけん恐れ気もなく近づき

しを彼旅人ハひそやかに首をあげてつら〳〵見れバ同行さへあらで只一人屓須裡袍し未通女と見えて年齢破瓜余りなりいと大膽なるものこそあれと苦痛をわすれて看あぐれバ彼婦も手屓を伺ひ見て前後をにらむ乙女の顔色勇々しくもまた美艶けれ其時旅客声かけて〽モシ〳〵處女御チットおたのみ申たいどうぞしばらく此処へ〳〵ト呼かけられて順礼の乙女はおめる気色もなく〽アイわたしのことでございますかト近くよるに数ヶ所の疵と血しほの紅ゐこれハ」[1]とばかり驚きしが〽ヲ、これハむごたらしいなさけない目に合はしやんしたなァ盗人の所爲か意趣切かヤレ〳〵手ひどいことでハあるト屓須裡の布引裂て要所と思ふ疵口をこゝやかしこと巻むすび延齢丹とかいふべからん蘇生薬をあたへ介抱し〽サアモシ賓爺幼年もの長年を呼に伯父といふは俗の通称なり親類といふにはあらじどういふわけだかはやくおいひなそして私が肩に懸つて宿駅の所までおいでなさいこんな原なかでハお医者さまも招れず詮かたがないョ。子。爺さんトいへバ旅人うなづきて〽アイ〳〵これハ〳〵まことに御信切に有難い御介抱殊にマアお歳もゆかぬやうすだが深手の疵人と兼知して布や蘇合圖のおこゝろづけおかげで苦痛ハうすらぎましたがとても助命ハ」かなはぬ覚悟死ぬるハいとはぬことながら大事の使節を勤る役目お前の壮健な心を看かけおたのみ申ハ古郷へ音信どうぞかなへてくださるか〽袖すり合も前世からつゞく縁じやと申ますに御老人の御難義お見捨申もおいとしいどうで旅から旅の空おまへのお宅へ言傳ハずゐぶんおとゞけ申ませうト きいて旅人大いによろこび嬉しやかゝる美艶女の大丈夫であらんとハ死るいまはの身の幸ひ。そも〳〵批老ハ武蔵國多塚といふ里の長。杢兵衛と呼者にして領主平塚どのゝ内命にて越の長尾へ密使の大役首尾よくつとめ今日只今帰路いそぐこの梵豈はからんや合が谷の忍びの軍者に捕へられ同伴なしたる其人ハ後の杜にて」[2]あへなき寂期我ハ下卒に出立てかゝる時節にまぬかれんとかねて工みしことなれバ疵を受ても懐中の返翰までハうしなはずこれを古郷の領主へまゐらせ平塚豊嶋丸塚の三家を繁昌させ申さんと思ひの外にこの不覚長尾の書翰ハ持たれども砂金ハ巨多奪はれたりそれのみならで豊嶋殿の先年長尾に分捕せられし坂東八平氏の司令たる錦の籏をこの度のよろこびにとてかへされしを今戦ひのその紛れに落してさらに在所を知らずとにもかくにもながらへてかへるにかたき古郷へたのみといふハこのことなり家内にハ二人の幼年あり妙ハいふにたらねども兄は今年十六才いさゝか道理を聞わけてものゝ用にもたつ者にて名ハ梅太郎」と称はべる我に代つて錦のおん籏たづねて豊嶋の舘にまゐらせ実父の勘気の免を願ひしばらく養父となりたりしこの杢兵衛が誤ちを領主にわびて妹にハ家督を継せくれよかしと傳へたまへと合す手もふるへふるふて合掌かぬる苦痛さこそと順礼ハ杢兵衛を抱きつゝ〽アレ爺さん氣をたしかにおもちよどうしてもかなはないとお思ひならおまへの遺言をわかるやうに申ませうトいはれてうなづく老人ハ息もたゆげに見

【挿絵第一図】




旅客をあはれみて青柳合ヶ谷の歩卒を破る

えけるが賢き婦なりけれバ取期の思ひ出安堵させんと耳に口よせ〳〵モシ爺さんわたしも元ハ湯ヶ嶋の丸塚さまの浪人で。菊坂小六といふ者の娘青柳と名を称ますが爺さんの遺言で嬢母さんの行衛をたづね先祖の名を絶すな」[3]と云つけられた大事のこの身また母さんハ御卒家の豊嶋さまに由緒の家。そうして見れバ余所外のやうに思はぬおまへのおたのみかならず〳〵案じないでトいふを聞より李兵衛ハさも嬉しげに合掌すれどはや舌こはりてものさへも云ぬハいふに大丈夫もおよばぬ乙女青柳の後にうかゞふ雑兵がさてハ豊嶋に由縁の曲者〳〵合が谷の御諚意なるぞト組付利腕ねぢかえし突のめらせバまた一人横に來るを腰なりけるひしやくの柄にて咽の真中突れてアット一聲と倶にがつくり没命手眉なほこりもせず走寄士卒身を開いて蹴かへされ傍の溝へはづみを打ざんぶと落て生死をしらず未通女ハこれを見もやらで李兵衛をいくたびかいたはりながら呼いくれど」【挿絵第一図】[4]はやことぎれて甲斐もなくさすがハ乙女心とてうら悲しくも泣いりしがやう〳〵と氣をはげまし〳〵嘯爺さんと呼んだところが返事もないはづモシナア李兵衛さん魂がまだ遠くゆかずハよふく聞しやんせおまへの疵所を結止た布ハわたしが眉摺の切で結んであげたゆゑ冥土の旅に結縁の札所の御利益ありもせバおめぐみ深い圓通大士現世ハ古郷の子ども衆へ福壽の誓ひ空しくはあらぬこの世の苦をのがれておまへハ菩提の即身成佛かならず迷ふてござんすなト在すがごとくくり言もいふて帰らぬ死出の旅わが身

も旅の空ながら捨ておかれぬ亡骸を片辺の丘に埋めつゝ長尾殿より平塚へ返書の類かたみともなるべきものを携へて。駅路さしていそぎゆく心淋しき野に」[5] 山に思ひやるさへいたましきそも亡灵もいづくへか宿りさだめじはかなやと胸をいためてやゝたどる路の夏草露の葉をいくつ飛かふ蛍火も魂かとぞ看る木の間の月かへるにしかじと鳴とりもしでのたをさや古郷にこれを待らんまつかひも。なくてまつるハ新盆の用意にこそハなりぬべしと心細道里をすぎ三日路ばかりゆき〳〵て戸田の川原にいたりしが金烏ハ西に傾きて申の半刻にすぎたりけるがこの節ハ世の中静ならずことに街道物騒なりとて申の時よりハ往來もまれにて渡し守さへあらざれバいかゞハせんと猶豫中川上よりして一艘の小舟をこぎて來る者ありちかづくまゝによく看バ四十才あまりの姥にて舟漕業に馴たりけん余所看をしつゝ艪をあやどり」此方の岸に舟を寄〈モシ女中さんおまへも向ふへ渡るのかへ〈ハイさやうサ〈アハ、、、三年三月河原に彳ても申刻から先へ渡しハ御法度それとも今から渡舟たくハ渡錢をチツトよけいにお出しト中をゆびさして船のコレこの娘ッ子も不案内で川上の岸にまごついて居たのを乗せて來たのだ此岸からハ揚られねへがこれから直に引汐で豊嶋の揚場か下尾久の渡し口からあがりやァ格別無理にこゝからあがつても關所があるから行れねへトきいて青柳渡りに舟と彼舟の女に向ひ〈そうとハ知らずうか〳〵と船の通ひを待てゐましたどうぞそんならその舟で〈豊嶋でよくハサアお乗トいへば船より一人の乙女これも其年二八ばかり田舎神子女と看へたるが練絹の帽」[6] 子を額に當て手織の麻の紅紡丈長からぬ振袖に白綾の薄衣かけてそれより白き顔ばせの愛敬づきし唇の紅なでしこよりうつくしく青柳を呼かけ招きつゝ〈モシ〳〵姉さんこのおばさんのいふとほりだそうだからわたしと同伴に豊嶋とやらまでお出なさいなト女子同士とてやさしくも聲かけられて青柳は姥の船に打乗る折から河越の武士谷の幕下なりなりけん五七人走來り〈ヤイ〳〵その船を出すな詮義があるぞまて〳〵。〈ヲホ、、、仰山な村の子どもが近在を小遣ひ活業のもどり足同伴に帰る田舟の中何の詮義があるものかトあざみ笑つて漕舟ハ水に任せるさか落し彼武士等が呼こゑを耳にもかけず川下の南の茅沼芦の洲や東に流れ北へ」寄りはてハ寅卯の間をこぎ荒川さして下り船矢よりもはやくながれゆくかくてこの船夜にいりて神宮の北にかすかなる下村といふ片鄙の岸につなぎて彼姥〈サアマアこゝから揚なせへ乗なれた川だけれど昼の暑さでがつかりしてモウ〳〵艪も棹も遣へねへ〈ほんにそうでありましたろうサアモシ神女の姉さんおまへもいつしよにおあがりなトたがひに手をとり青柳がわが名の垂て川水に髪洗ふなる月の蔭鏡にひとしき空をながめ〈まことにいゝ夜光だねへアレ桟橋がすべるョ〈ハイありがたふト打連てあがる厂木の向ふにハ早くも前へ廻りたる河越武士の路をふさぎ〈おたづね者の田舎神女同伴もたしかにその同類サア尋常に縄かゝれと」[7] 取巻大勢彼老婆ハ

二人の處女をうしろに囲ひ　舟女「ア、モシ〳〵この娘は両個ながらわたしの姪子かならずあやしい　武「ヤアいふな〳〵わいらがいくら隠しても合が谷の御所からして出奔なした侍女両個元ハ長尾家の間者　姿の美麗にひきかへて心の太き處女ぞと命を請て看あたつた女郎を逃してよかろうか邪广ひろぐなト走寄るを姥ハ突退はねのけて思ひの外に健氣なはたらき　舟女「こゝかまはずと無失の難をのがれるやうに落た〳〵ソレ其茅原が豊嶋の御領一町行けバすぐに御陣屋はやくお役人に人間逡ひ不慮の難義とおねがひ申なはやく〳〵と透されて欠出す草むらかねてよりわがね結びし足手まどひ忽ち倒るゝ両個の美女彼」武士等ハ下重なりやがて縄をぞかけたりけるこのとき舩郎せし姥も倶に會合て皃見合せ仕合よしとうちわらひくまなき月を燈明とし荊棘薮蘭森の中路なき難所をたどらするに両個の未通女ハ詮方なくおめ〳〵として引れゆく無念ハ面にあらはれて推察さへいたましきこれハさておきこゝにまた於斉の尼と法名して歳齢五十才に近き尼公の武藏下総を徘徊して因を説果をしめして濁世の衆生を済度する道徳の此丘ありけるがこのころ神宮の薮中山満化寺とか称なせし荒たる古寺に寓居して近郷を勧化なし踊り念仏といふことを催して十二三より十五六の處女を集てこれをなすに舞子の進退を教へもしつまた弥陀如來の利劔と名号け降」[8]魔の太刀打闘場陳念彿和讃の合の手に踊る拍子の太鼓の音ハ修羅の鼓の趣ありされど近年合戦のこゝや彼所に絶ざれバ里の若輩少女等も臨終らるゝ説法よりはるかにまさる尼君のをしへなりとて流言老若浮薄と法場いと〳〵繁昌したりしとぞ

## 第八回

凶信愁傷會三賢婦
戀情賢能告正深志

亦説文明五年秋七月十日の夜半のことになん彼多塚なる梅太郎は思ひがけずも卒家なる於袖が戀情の深きにより當惑いはんかたもなく心をいためありけるが於袖ハ一途に梅太郎を好漢と思ひしことなれバ恥かしきこと」言尽してとりあげられぬ卒意なさに既に命を捨んとて走出したる庭面の垣根に寄添ふあやしの女さすが死ぬると覚悟しても不慮のことゆゑもの恐怖してアット一声倒るゝ於袖隣れる家よりお張ハ欠出おどろきながらことのよしをきいてわが家に伴ひつゝしばらく介抱なしけるとぞ此節梅太郎ハ心をしづめ　梅「まだ夜もあけないのに人の門口さし覗くハ合点の行ぬ見れバ女の順礼姿　同行もなく只一人真実の修行者でハあるまいなたしかに家内を窺ひてもの盗まんとたくむであろう同じ形容の人ながらさもしき人の心でハあるト於袖がことも心にかゝれど折戸をはたと閉きりて飛石づたひに居所のかたへ行を順礼呼止め　順「アレモシちよつと物問ませうこゝハたしかに多塚村」[9]アノ庄屋の杢兵衛さんとおつしやりますお人の居住を御存ならバをしへなされてくださいまし　梅「ナニ庄屋の杢兵衛とハ此方じやが一向看知らぬ其方の風俗とがめられを紛かさんと用でもないこと尋ねずとも早く其所を立さらぬか

順〳〵なるほど時ならぬ折まゐつたゆゑおうたがひハ尤でございますが曲者でハございませぬこちらを人でなしといふ其身も親ハ旅の空あへない寂期をしたとも知らず娘子どもを引いれて姪蕩らしい今の風情親御の遺言をつたへてもいふ甲斐もない梅太郎さん遺物もほしうハございませぬか長尾さまの御返事もわたしがすぐに御領主へトいはれてハツト梅太郎虚実ハいまだ弁へねどおのが名を呼び親のこと旅の噂に凶事のことば聞て」胸さへとゞろかし梅〳〵イヤこれハ大きに麁相なこと此間近邊が物騒じやと昼夜要心する寂中ことに此方に取込があつたから前後も考へないでひよんなあいさつ氣にさはつたら了簡してマヅこちらへト柴折戸開て伴ふ縁の端腰うちかける順礼ハ田舎乙女と思ひの外容儀ものごししとやかに亦是一個の美人なりこの時月没鶏ないて夜ハしら〳〵と明わたりぬさて梅太郎ハせき立て養親とも頼てし李兵衛が身の覚束なけれバいかにありしと問よれバ彼順礼ハ携へし長尾の書翰遺物等を取出しつゝ物語る松井田原の一件また李兵衛が遺言まで落なく説て聞せけれバ梅太郎ハやゝしばらくあまりのことに胸つぶれ途方にくれてことばなく勇智ハ兼ても」10真ハ女子かゝる節にハ涙のみさきだつ人の心根を思ひやるさへいたましく正躰なくも伏沈む其虚を窺ひ順礼の未通女ハ柄杓をふりあげて真向はつしと打込むを右と左りへ顔ふりそむけまたもうち込む手なくびをとらへてずつくと立上れバ倶に突立乙女の大膽とられたる手を振はらひ順〳〵歎きに大事をわすれたら親御へ孝行になりますかたとへお歳ハゆかないでも義理ある親の遺言された豊嶋さまの御宝錦の御旗をたづね出し実爺さんの尊灵へ御主君の御勘氣詫言をしてあげられずハ濟ますまいたよはいお方とうち笑へバ梅太郎ハ用心のなかにも乙女が弁才利口説つけられて歎息し梅〳〵モシおまへハ未通女にハ珍らしい御發明もつとも大丈夫にまさつた」御氣性それでなければ松井田の修羅の街で爺さまの頼みを聞てはくださるまいマアいさましいおまへの生長さだめて深い御様子があつてやつしたそのお姿くるしくなくハ氏素生をどうぞ明してくださつてハ順〳〵おまへも実をおあかしならバ梅〳〵サアわたしハ此家の養子といふハかねておまへも知つての通り順〳〵イヽヱそれよりおまへの姿變生男子の由來をどうぞ梅〳〵ヱヽ變生男子とこのわたしを順〳〵うまくこれまでおだましだろうがわたしハ悟つたおまへの本形梅〳〵シテその證古があるのかへ順〳〵證古ハ神宮の薮中山満化寺の道徳於斉の尼の招介帖これ看なさんせトさし出せバ梅太郎ハ手に請て梅〳〵コリヤさうゐない尼御前の自筆の状でございますそうして見れバ」11おまへもまた豊嶋へ由縁の娘御で順〳〵丸塚の浪人菊阪小六が娘青柳と申ますこれから始終心をあはして梅〳〵豊嶋の正統路姫さまを青〳〵これまで知らずにをりましたが尼御前の御教示を聴て御法の花衣佛果でハない國家の御為トこれよりさすが梅太郎も実事をあかす女の情自然としづかなりけるがそも梅太郎ハ何日のほどにか於斉の尼に見参せしやまた於斉の尼ハいかなる人ぞ巻をかさねてくわしくす

【挿絵第二図】

義婦凶信を多塚に告知す

べしかくて青柳は今朝こゝに來りたる夜中の始終を告る中に彼女船長河越の兵に出立しハ於斉尼の手に屬したる人々なること其身草中に生捕れし後於斉尼にかたらはれたる由をものがたり只いぶかしきハ同年来なる田舎神女子の満化寺の「【挿絵第二図】」[12]」地中にいたりて縄をはづして逃去りし働き未通女に似氣なき大膽なりとこまやかにかたりけれバ梅太郎ハこれを聞て青柳にうちむかひそは残り多きことになん貴嬢に等しき其婦人などで因を結ばざりしといたふ悔みしかバ青柳ハうち笑ひ否そのことハくるしからず尼公にハこれを卜占て今この未通女の逃たりともまた再會の節ありて義の姉妹となるものぞと告られたれバこの末にいつかハ逢ですごすべき於斉の尼の神占ハまた頼母しき縁にこそト閑談時をうつせし折節母屋よりして杢兵衛が実の娘のお竹が聲〳〵兄さんお飯が出來ましたトいひつゝ欠て來りしが青柳を見ていぶかしく〳〵ヲヤ兄さんこの順礼の姉さんハお客かへト何心なく於竹が尋ね梅太郎ハ」[13]さし俯向こたへも曇る涙ごゑ〳〵ヲヽ、お竹さんかへ今おまへにそう云はふと思つたところだよ此姉さんハ爺さんのお使だよ〳〵ヲヤ〳〵そうかへそしてお爺ざんハ何日ごろお帰りだ子ヱト聞れておもはずなきだすかほのぞいて於竹ハそれぞともまだ悟らねど俱なみだ〳〵兄さんナゼそんなにお泣だへ爺ざんが途中で塩梅でもわるいとかへ。ヱ。ヱ。梅さんはやく云ておきかせよョ兄さんトいへどいらへも泪のみはてしなけれバ於竹ハまた青柳にむかひ〳〵アノウ姉さんおとつざん

が何といつてよこしましたへ。ヱ姉さんト問かけられ是も於竹がこゝろ根を思へバ不便さいぢらしさ泣じと奥歯かみしめてなか〳〵答へハならざりき於竹ハ両個が泣兒になほ氣にかゝる親のこと梅太郎をゆり動かし〈竹〉「ヨウ兄さん」はやく爺ざんのことをいつてお聞せヨウどうかしたのかへ。ヱ兄さんト泣いだせバ思はず泣伏す梅柳中に倒れてなよ竹の葉露もはら〳〵泪の雨丁度三人が川の字に波立ばかりの歎きなり梅太郎ハやう〳〵に起かへり〈梅〉「アノウお竹さんよくお聞よ爺ざんハ旅から旅へお出だからモウどうしてもお帰りでハないョそれだから今までと逮つてなほおとなしくおしよそしてわたしハそのことでまた旅へ行から淋しかろうけれど当主をしておいでよ〈竹〉「アイト返戛も口の中幼けれども發明にてはや十二才になりぬれバそれとさとりて悲しさも頼すくなき孤子の心細さをたれにかハかたらんよしもあらずして力となるべき梅太郎がまた旅立ときくからにいよ〳〵歎きハとゞまらず〈竹〉「兄さん爺ざんハ何処で」[14]死んだとお云だへ名医者さんがなかつたのかへどんなにせつなかつたかだれもさすつてやるの。もんであげるのといふものも有まいねへそしてお寺へお吊ひをまだしないのなら爺ざんの死んだ宅へ連て行ておくれなモウ逢ことが出來ないからとうぞ顔が看たいョ。ヨ兄さんト泣くどかるゝ梅太郎も知らせに來りし青柳も涙の果しなかりしところへ家の支配の鍬八が〈鍬〉「サア朝飯にしなさらねへか朝ッぱらから串戯ちやァ泣たり笑ッたりするだァお芋ばァさまが小言をいひまさァはやく食事しまひなさいト聲を掛つゝ背戸の方畑をさして出行バ梅太郎ハ思案を定め掾に立出母屋の方窺ひながら座に直り〈梅〉「お竹さん悲しいハ尤だけれどモウ〳〵思ひきつてお泣でないとハいふものゝ無理なこと」これが泣ずにゐられうかおまへもわたしも便りないたつた一人の男親別れといへバ何时じやとてかなしくない日ハないけれどせめて二人が看病してかなはないまでもお医者さまのくすりョ針ョと介抱のうへで退れぬ定業ならまたあきらめもならふけれどお歳よられておいででも不断達者なアノお身が多勢のために数ヶ所の深手苦痛もさこそとおいとしい〈竹〉「そんならバ爺ざんハ他にきられて死んだのかへ。ヱ兄さん殺した奴ハ盗人だとかへまた喧呶でもなさつてかへェ、悔しいかなしいねへサア兄さんこの姉さんが爺さんのおたのみで殺した人をも知つておいでだといふことなら同伴にそこへ行てもらつてどうぞ爺ざんの敵が取てあげたいねへヱ兄さん直に支たくをおしでないかヱ兄さんトせき立て涙をはらふ怒りの」[15]面色憤然として歯を喰しばり握る拳も和らかな蛍狩とか手玉[ママ]とかたとへていふべき幼なの所為くれされどはげしき大丈夫におとらぬ勇気恩愛の深きハこゝにあらはれて哀れにもまたいさぎよし梅太郎も青柳も三ッ子に浅瀬のたとへに等しく泣のみならんと遠慮して告兼たりし杢兵衛の横死と聞て壮健にも敵を打んといふを聞〈梅〉「アノお竹さんおまへはいつものよはむしと思ひのほかに強い口上敵がとつてあげたいとハ感心した親孝行しかし一人や

二人でハうつことならぬ合ヶ谷臣領家の順検士ことに領主の長尾へ内通露顕と見えし大切の場所においての打死ハ勇士もおよばぬ忠義の功たゞ残念ハ錦の御簾爺さんハ取落したと青柳さんに被仰た」そうだけれど領主の卒使が死ぬほどなりや急度鎌倉へとられたにちがひはないョ竹「そんならバどうぞ爺父さんのお吊ひでも卒式にしてそれからその御簾とやらをたづね出して梅「サアそれゆゑにわたしが旅立おまへハよふく当主居してとハいふものゝ内外の者へまだこのことハ知らされないョわたしハ旅へ行跡におまへばかりが残つて居て爺さんが死んだと聞たら子どもばかりと馬鹿にしてわるいことをたくむ者が出來たときハなんぼおまへが才智でもなか〳〵一人で防がれるものでハないからわたしが帰つて來るまでハかならず他人に知れないやうにト於竹に萬端得心させまた青柳をかたらひて梅太郎が帰宅までこゝに止りお竹がために余所ながら後見の要心となし家内のものへハ杢兵衛より書状を以て」16 青柳を家にとゞめて置べきよし言越たりとこしらへてその日より青柳を於竹にしたしく友として梅太郎ハ杢兵衛の招きにより越の長尾へおもむくとて旅の用意をしたりけるかゝりし所に隣れる家の於張ハ梅太郎をあひまねき於袖が必死の覚悟のおもむきつまびらかに解つけて若情念をはらさせずバ縁者の因ある乙女を殺して卒意とおもはるゝハいと〳〵情なきことぞと於袖も倶に怨めしげに言葉かずさへ尽さずに只さめ〴〵と泣口説れ當惑いはんかたなけれど今になりてハ猶さらにあかす由なき大事の身恩義の養父妹のため実の母の遺言など三ッ四ッ五ッ六かしき思案に胸ハ安からずとハいへ於袖が死かねまじき風情ハ既にあらはれたれバ當座の命を延しなバ」程経てうつる人心われを忘るゝ節あらんしかりといへども旅立のわけの実ハ告られず誠を告ずバ才智の未通女たゞ振捨ると思ひとり身をあやまつにいたるべしとやゝ肺肝をなやませしがやう〳〵に心をさだめ梅「おはりさんの御信切お袖さんそれ程思つておくれなら否でハないが耳に口何やら告れバお袖ハ顔をさと赤らめて嬉しげなり元來お張ハ媒人なりそれとさとりて獨り言張「ほんにわたしとしたことが極樂水まで急ぎの用をさつはりわすれた佛性も頼んだ人へハ罪つくりドリヤひと走り行て來ますてうど当主してくださいまし梅さん和合よくお遊びョト粋なふりして甘口にはかりおほせし内心梅太郎ハ卒家の伯母の作署とかねて推察ハなしてもお袖を不便」17 とおもふこれ卒生の女同志男子の気にハすこしく戻れりさても両個ハ對座於袖ハ何といひ寄ん言の葉草に露おもき泪の眼もとほんのりと上気せし顔そむけつゝ向ふへそらす掌の指とゆびとに綾どりてなまめかしくも愛らしゝ梅太郎ハ歎息し心の底に思ふやうわれもし真の男子ならバこの艶婦に惑溺して生涯をあやまちなん実に慎で守るべきハ男女の戀情なりきとおのれをつゝしむ賢良貞婦これ八賢志の軍一にてこれにますべき智勇の賢婦なほ出べからんか知らねどもこゝにハ得がたき秀才なるべしそれハさておき梅太郎ハ於袖を近く寄り添せ

梅〳〵アノお袖さんだん〳〵おまへのおこゝろざしを聞て見れバ親御さん達の善悪ハ兎もかくも私が身にふりかゝつた」難義なことさへないならバ両個いつしよといひたいけれど今おわかれ申たら又あはれるやら逢れまいかと末の覚束ないことがあるゆゑどうぞおまへも聞わけて萬一わたしが旅立て帰らぬやうになつたならどうしてもない縁だとあきらめて神宮の家を御相續なさるが先祖へ御孝行よしやわたしが旅先の用が早速らちあいて直に帰つて來るまでも縁がなければそはれぬもの始めハいやと思つても神々さんの結んだ中ハそぐはぬ様で末とげるそれが誠の夫婦ごと皃や容に惚たとて無理な戀路や縁組ハかならず〳〵しないものじやとわたしの母が手ならひの子供に毎事をしへたをおぼえたとほりいやらしくいふもおまへがいとしいゆゑ子お袖さんわたしも実ハ惚てゐて前後おもふ信切をかわいそう」[18] だとお思ひならおまへもちやんと思ひ切てわたしを旅へ立しておくれト云つゝしつかり握る手に千萬無量の思ひを籠め想をはらさす變生男子姿ばかりの好漢にハ外に詮方ありとてもその情慾をはたさせてハこれ梅太郎は不義にしてお袖ハ一旦男子に合しいたづらの婦に落没てこのすゑ未通女といふべからず必竟於袖が返答ハいかにそハ第九回を看て知るべし

貞操婦女八賢誌初輯卷之四」[19オ]

# 貞操婦女八賢誌初輯卷之五

東都　狂訓亭主人編次

## 第九回

号神女真弓弘占ト
告昇天冨嶽催神祭

清少納言の枕双帋といふもの書るハいともいみじき賢婦なるかな哀なるものといふ所の始に孝ある人の子と書いでたり人の道多くあるが中に親に孝ある心こそ第一の所為になん君に忠を尽し友だちに信あることも皆先孝を元として其心よりおよぶとぞされバ君子ハ元をつとむ卒立て道なる孝弟ハ仁をおこなふの卒かと論語にもしるされたり実多塚の梅太郎が親に」孝ある心からまた佗人に信ありてお袖が戀情の痴なるをもなほあはれみてこれをさとし心急ぎの中なれども別れを告て信切なりしにお袖は何と返答さへ泪さしぐみゐたりしがやう〳〵に顔をあげ恨めしげに梅太郎の顔をまもりて淄息をつく〴〵おもひ廻らせバいとゞゆかしき情人の容儀才智のなみ〳〵ならで我さへ悟らぬ継親の奸計までを視察したる思慮はなか〳〵凡世の人のおよばぬことのみかハ戀慕に迷ひて親にはかられ男の持る證状を奪はんとせしこの身をにくまず親子の心の一同ならぬを知りつゝ手形を与へんと惜氣もあらぬ大器量かゝる人にぞ身を倚せて妻とよばれ夫とかしづき朝夕和合日をおくらバ食ハ乏しく美服着ず錦ハ夢に看ずともあれ草の蒲團も玉の床」[1] さぞ頼母しくあるべきに養父の所用につきて今出ゆかバ帰らじと固くは云はねかへられ

ぬことあるならん其節ハなまじ結ばぬ縁こそハ後に悔しきことあらじといはるゝ胸こそ心得ねとハいへやさしき言の葉ハ此身をさばかりうるさしと忌嫌はるゝ風情も見えずこれにハ深きゆゑあるべし問あきらめて見んものと情を籠て握られたる手をその儘に梅太郎が膝に保れてあどけなく〳〵梅さんわたくしのやうな聞わけのないものを氣を永くだん〳〵お云だから思ひ切ふと思つてもあきらめられぬ因果な心どうぞお側に居られずとも両方の心に夫婦だとせめて一言おいひならそれを一生の樂みにしてくらすからお否で有ふが今日からして心ばかりの夫婦といふことをどうぞ得心しておくれな。ヱ梅さん。ヱお否かト」生まつはりし姫蔦の言葉のつるを情なくとくに解れぬ義理となり彼青柳の告きたりし錦の籏の由來を明しこのたび松井田へおもむけどはや彼地にハあるものならじ御籏ハたしかに合が谷殿へ取収められしと覚ゆれバ其身假に女の風姿になりて宦領家へ立入て何とぞ御籏を奪ひかへして豊嶋殿へ奉り其功を立たる後に兎も角もなりなん由をつまびらかに告つるがなほ女子ぞとはこゝに明さずそハ何ゆゑぞと推はかるに柔弱なれども誠ある處女なるから万に一ッ用ゆる時節もあらんかと後を思ひて深くかくせしとぞされバお袖もやう〳〵になだめられたる情念の死るときはめし覚悟をバしばしハとゞまる気色なれば梅太郎ハ別れつゝおのが家居に帰り來て青柳於竹に前後のことをよく〳〵頼み教え」[2] おき中二日に支度を調へ日限知られぬ旅なれバ寒さに向ふ綿入の肌着の衣のと女同志心をつけつつけられつ所にひさぐ菅菰の簑よ小笠と取揃へ門出祝ふ軒並び隣家の人に知らせじと凉風さそふ暁に東を拝む廐嶋立立派に見ゆる梅太郎が腰に帯する一刀ハ藤六左近國綱が鍛打たる二尺三寸 重厚なる古刀の名作女子だてらに重けれど孝義に輕き命ぞと身も軽らかな夏浴衣の袂を拂ふて旅立ぬこの時ハ是文明五年秋七月中の五日のことなりとぞ

因に曰國綱と名号鍛冶五人在とぞ備前に一人肥後に二人字土と菊池三河に一人こゝに記せし國綱ハ粟田口の住人にて正治年間の人なり西明寺殿の御供して相刄鎌倉に下る後に左近將監と改名せり」

両話説こゝに亦神卜仙女真弓とて観相易術に秀たる神變不思議の女神巫あり元是何処の神祇宦が家に生れし處女なるか其來暦ハ知らさねど延喜式内式外の神社を流通に兼知して凡神祇の祭文祈誓弁明せずといふことなく猶易道の妙材ありて前漢の焦延壽。京房が右なるべしと専ら風聴せられしが此頃武藏下総の在々を徘徊し人相 占を施して里人等に重用せられしが歳ハ纔に十あまり六七にやなるべきかと問ふ人あれバ彼が答へハ二十五才ときこえけり誠しからずと思へども弁舌才智をいふ時ハ三十才を越し女といふとも常人いかでか是に當らんまた容兒の美麗をいはゞ待宵に蜘虫を詠じたる衣通姫にも勝りつべく體軽柳腰の艶姿をたと」[3] はゞ漢の成帝の寵后飛燕が朝に召れぬ節ハかくありけんかと思ひやる実に無双の

【挿絵第三図】

未通女なりしが此時しも武藏國豊嶋郡峡田領湯が嶋の本郷村に古く祭りし神社在そもこの社ハ麻芦津姫大山祇の二女を崇 冨士淺間と祝こめて毎年の礼祭怠らざりしが今年ハ村方ゆへありて六月の祭礼を延せし処に一村邪祟におかされて病人漸々に絶ざれバ俄に村長が評義して彼神卜仙女真弓といふ女神子をかたらひつゝ冨士浅間の社頭において湯花の興行を催しけりされバ真弓ハ時を得ていづくよりかは雇ひけん宮奴両個をつれ來り彼等に神前の供物祭式を司どらせ亦境内に鼎足を用意なしこれに居たる大釜ハ旦五尺もありぬべし真弓は衆人に」【挿絵第三図】」[4]」告ていふやう我身年来神いさめの業をなして神慮を清浄たてまつりなほ人の吉凶禍福を視看してハ既に天機をもらすのとがありしかりといへども八百萬神の冥助によつてこれを免れ旦還童の術ありて若やぐ法をなしたれバ常にハ二十五才といひしが実ハ今年六十一才これ天元の帰数なれバ此度湯花の法筵において神魂を高間ヶ原に昇遊せしめんと覚悟せりされど凡體を穢土にとゞめまた黄泉に下すをいとひ祭事全たく終りなバ身を生ながら熱湯の中に投入て神霊昇天の奇特を見すべし世にありふれたる神職 神女等が奉幣湯花と軽しめて参詣せざる輩ハ後に悔しきことありなん我皇國の神慮をおそ」[5]れみ志願をなさんとおもふものハいかなる大望なりといふとも供物祭式に米銭をいとはず崇敬の信を尽して祈なバ宿願 成就疑ひなしと兼て其意をしらせしかバ道俗これをきくよりも余のことハ兎も

角も生ながら熱湯に身を投いるゝといふことのめづらしけれバ云傳へ語りつたへて遠近の老少男女の分別なく其日の至るを指をりかぞへ心樂しく待侘て東に遠き村人ハ湯が嶋に旅宿をもとめ西に隔たる在郷よりハ森川の宿にやどりをなしその祭礼を待たりけるかくて七月二十五日神卜仙女真弓こそ昇天の行力満願の日なりとて未明に小冨士山の境地にいたれバ村長里人助力して供物の用意廣大なりそも〳〵この冨士山と称するハ」丘に等しき小山なれども芝崎より浅草の野末にかゝりて西にあたりし山手なりされバ湯が嶋の臺の高きよりまた一際たかけれバ武藏野の冨士といはんもまた宜なり西ハ森川宿に下り南の方ハ丸山に程近く正に勝景の名山なり元この山上に浅間をまつりはじめしハいと〳〵古きことにして昔この丘に松の大樹のありけるがこの梢に毎年六月朔日より三日の間雪降つもりて冷風起り近く寄れバ寒氣肌をさすがごとくわづかに一町隔ずして炎熱蒸すがごとき日もこゝなる松のもとに來れば嚴冬の節にまされりとぞしかりといへども人民等この寒風にあたりしものハ忽ち邪熱におかされて病人すくなからざりしかバこれ神霊の咎めならん」[6] と郷人等が寄集ひて二女神を祭りしとぞこれより郷村の氏神とて崇敬大かたならざりしが應仁の乱れより諸國の神社佛閣まで軍役兵粮の運送歩役またハ兵火に焼亡などあるのみならで國民の役につかれて神佛へ思ふ儘なる手向もならずされバ當社の荒はてて本社拝殿全きのみ餘ハこと〴〵くすたれたり東阪なる火焚屋のみいさゝか雨露を凌ぐとか実に浅間の境内なりきされど今日なん珍らしき湯花の祭礼あることなれバ例にハあらで賑はひけり時に真弓ハ辰の剋より祈誦祭文数百遍天津祠言太陽祠言六根清浄の御祓をなして神拜をはりしづ〳〵と卒社をいづるその邪相身にハ白妙の浄衣を着し紅梅の肌着裾長く紅の湯」巻ハ両足を包むがごとし長に等しき黒髪を四方へさつと振乱し左手に一枝の榊葉を取り右手にハ光々たる白刃を引さげ猛然として拜殿の大床に立たれバ群參したる貴賤の男女弥がうへに屓重りこれを見んとてきそひ寄るされバ真弓ハ庭上に踊りいで彼大釜の前にいたり熱湯を榊葉にてふりそゝぎ振ちらすこと数度やがて妙なる声音にて年の豊凶病災福祥つまびらかに神託の要意をつげそれよりまたも社前に上り休息すること二時あまり愈然として動かされバ残暑に日蔭をいとひかね殊におし合ふ数千の老若蒸るゝごとく暑けれバ流るゝ汗ハ釜中に涌湯玉に等しきありさまなれバたがひに息もくるしげに神子に代りて熱湯にわれ〳〵こそハ」[7] 入たれとて苦笑ひしてどよめきけるがやゝ时うつりて日輪も西に傾く申の半剋両個の宮奴釜前にいたり積かさねたる薪をバ左右よりしてさしくべつゝ炎ハ風にひらめきていとすさまじくもえ上り火燄ハ發と八方に散乱し群集もどつと崩れ立折から真弓ハ高声に眼耳鼻舌身意六根清浄の文を唱へ例の白刃を打振〳〵忽然として熱湯の辺りに近くすゝみ寄ればすはやと四方の参詣人押合〳〵我先にとかき

分いづる姦しさ真弓ハ群参の老若に打むかひいかに集る人々よわがいふ教へをよく聞候へいとも尊き皇國に生を得て神德を仰ぎたてまつらざるハいと〳〵愚昧のことならずやそれ佛は後生をすくふて現世を穢土とすされど施物を仏に供養しもつて來世を」助らんと願ふことこれ普通のことにして自他平等の結縁とすいかにいはんや神國の神の御末にありながら高間が原に神崩たまひてなほ芦原の中洲を安土とこそ守護たまふ神慮をバ青ひとぐさのおろそかに思はゞいかに勿躰なきことゝ知らずや知りもせバ此宝前に財をさゝげて一时礼拝の冥助を祈りかぞへていはゞ陰陽の尊神を崇信し三社の託宣四所明神の教示感得の霊應を祭り稲荷五社の神通を仰ぎ府中の六所を尊みて七世の子孫安寧の廣德をいのれかし猶年々の歳神を敬ひてハ八将神霊の利益を蒙り厄年たりとも平安ならん九天諸神十方鎮座の神々を麁畧になさず且また神を祈るにハ先氏神を拜すべし斯の如くに祭る时ハ四海に在」[8] 所諸天善神信心力に加持なして應護の奇瑞を速に添給はざる事有んや夫神道の教に反ず清心を呈進して利益を祈り参詣人ハ福德自在の冥助をかうむり子孫の栄え疑ひなし慎で崇敬あられよといと高声に説示せバ元来當社の神德ハいにしへより明白今また真弓が神霊の実に託する形勢をさも嚴重に看せたりけれバ遠近の道俗男女泉聲に祈念しつ六根清浄を高く称へ南無と一声いひかけて阿弥陀佛を口の中に称ゆるものも多くありて幾千貫の銭財をみな一同に投たりけるこの節真弓ハ何やらん一際聲高く誦へつゝ阿波の鳴戸になほまさる湯玉の響き震雷も及ばぬ釜の熱湯を白眼つめて立たりしハ岩戸に近寄る戸隠しの神もかくやと思ひやる」中にも美麗の体に心をなやますやからもありされバいよ〳〵涌上る彼大釜の沸然と浪立中へ身を踊らして飛入れバ湯玉ハさつとほどばしり散乱たる其雫ハ看宦の衿元にばら〳〵と降そゝぐアツトばかりに群集の貴賎うろたへさはぎ身の毛立て釜中を覗くものもなくたま〳〵覗く者あれども湯烟り白く蒙朧と雲の如くにたなひけバ伸上りても見ることかたくしばしどよみて居たりけるが二人の宮奴ハ頓て薪の火を打消し銭財を拾ひあつめて神前にはこぶまた疑ひの深き族ハさらに熱湯のさむるをまちて釜の中をかきさぐるに無慙や真弓は煑解たりけん骨さへ残すこともあらで尺ばかりなる金の幣の只一卒ぞ出たりけるこゝに至て里人等」[9] 其神霊なるを恐れつゝ西に没日ともろともに山を下りて邑里へ別れわかれに帰り行かゝりし後に宮奴ハ後に殘りし村長五七人にむかひていふやう「さてはや庄屋さま方終日のお倦労しかし首尾よく御祭礼も相済まして惣村中の御安堵各々も寐はや御帰宅御休足われ〳〵両個ハ真弓が神魂のために一夜當社に通夜いたして祭文の礼を尽し明朝古郷へかへりますいづれも左やうにおぼし召て「なる程〳〵御もつともお二人が今夜こゝにござれバ社頭の火の用心も氣づかひなししからバ我々ハ引取ます。嗚呼はや覚悟のことながら神女どのゝ昇天卒意とげられて宜かハ知らねど凡俗の眼でハいぢらしいやうにおも

ひますトあいさつそこ〳〵打連て」かへる姿を見送りて宮奴二人ハ彼財銭を箱におさめ縄にてからげ幾度にか卒社の後に森々たる林の中へぞ運びける折節此処へ歳齢四十才ばかりと見えたる女さもたくましき形勢なるが二八ばかりの容皃よき未通女に手拭を轡にはませ小手を高手にいましめつゝ此御社に引ずり來り拜殿の中に押入れて縄の端を狐格子に結び止また石段を走下けり此時遥東阪なる火焚屋よりして顕れいづる一個の乙女近邊を伺ひ懐より取出したる呼子の笛ヒイ引ト一吹ふきならせバ林の方より以前の宮奴二人ハ未通女の右ひだり「宮お道さま」「女二人の衆」「宮まんまと首尾よく鎌倉入の軍用金を」「女コリヤシイトあたりを見まはし神卜仙女真弓と仮名し愚俗をまどはす今日只今心に」[10] よしとハ思はねど父の仇たる合谷をねらふに付てハ落ぶれし姿でかなはぬことゆゑに神慮のおそれも知りながら財をあつむる手計「宮寐早金銭調ふうへはこれより直に鎌倉へ「真弓サア立入ことハ易くともこの節巨田持資の合谷に出仕してありと聞てハなか〳〵に近倚がたき宦領家「宮左様ござらバ今しばらく時のいたるを御待あつて「真イヱ〳〵時刻を延すとも何時か便宜といふでもない幸ひ手にいる此一ト品ト懐中よりにしきの簇をとり「宮それを用ひて何のお爲に「真ほんに子細をかたらずハふしぎにあらふこの簇ハ世にもまれなる蜀紅の錦の切であるはいの「宮うわさハきいてをりましたが看るハ初めの其錦がどうしてお手に入りましたナ「真ヲヽ不思議に得たるこの簇ハ昔年豊嶋の信國へ坂東八平」氏の司とせらるゝ御教書へそえてたまはるこの錦いつぞや其方衆にわかれてより或夜のことにて有けるが上野松井田の原中にてそれとも知らず拾ひ取宿りに着てよく看れバ由來を記す奥書に長尾景春と印たれバ豊嶋の重器を長尾より返進あると推量すれバこれもまた合谷の仇となる族としれバ頼ありとてものことに錦の傳來これが我身の益となり宦領家へ近付よるべき方便をくわしく物語らんその間に日中の供物で神酒頂戴「宮われ〳〵両個ハわづかな勤め貴嬢さまにハさぞお労れ供物も神酒も林の中仮屋の内に下置ました酒の燗する其間 貴娘ハやつぱりこの火焚屋さすがハ冨士のうつしとて凉しきおかげで蚊もおらずまづ〳〵あれへと進め入二人ハ林をさしてゆく」[11]

## 第十回

才女記億辨蜀江錦
赴神事毒婦計乙女

そも蜀紅の錦とハ元蜀江といふ文字にて紅と書ハ非なりとぞ今や蜀は除刄といふ此國四方に大河あり岷川沱川黒川白川の四ッなりこれこの蜀の錦ハ機糸を練に彼大河の清水に洒し精製なすこと数百遍日をかさね其絹糸赫々として光を發すかくて織殿に綾どるにいたりてハ金光室に満るといふこれ彼四川の霊水にひたし洒せるゆゑなりとぞ実に希代の錦なり故あるかな蜀と國号せし時ハいと〳〵古きことにして今の南京を呉の國と称へ孫権大帝と号今の河南を魂の國と称し曹操が子曹丕文帝と位し」今の四川を蜀といひて劉備玄徳が

【挿絵第四図】
浅間の森に真弓錦の籏の由来をかたる

照烈皇帝と称せられて彼地を治し時代に盛に織殿繁昌せしとぞ亦神仙傳に載せられたる左慈が字ハ元放揚州の人神異の術にて蜀の薑をもとむる條に曹操兼て蜀の錦を求め左慈に二端を買増ことを傳へよといふ談あり孟德が大活の生質にてさへ纔に二反のことをいへバ其時代多くハ求めがたく價も貴直ものとおもはるいはんや年暦を筭ふれバ三國の間六十年西晉東晉の代十五主にして百五十六年宋の代七主六十年南斎の代五主三十年梁の代四主五十年陳の代五主三十年隋の代三主四十年唐の太宗皇帝の貞観十九年ハ日本人皇三十七代孝德天皇の大化元年にあたれり蜀と号しハ」[12]大化より四百五十年の昔にして大化元年より文明までをかぞふれバ九百年にも近かるべしかゝれバ蜀江の錦といふハ千三百餘年の古物にしていとありがたきことぞかしかくて真弓が此錦を鎌倉へもて往くことを思ひ倚しハいかにとなれバこの節上総の笠森観音へ勅願のきこえありて關の東の諸侯の内室種々の佛具を奉納ありて宝前に備へかざり各々信者の功德を賞せられんと競ひけり其中に山内宦領の奥方よりハ笹づる錦の御戸帳をおさめられしを第一のほまれなりと風聞しきりなりけれバ鎌倉合谷の館にきこえ君の令室花の方もこれにまさりし錦をもとめてはやく笠森へ奉進しさすがに武家の寀一たる合が谷の奥方なりと賞せ」【挿絵第四図】」[13]」られんと思召在すといへども笹づるの古渡錦にまさるべきものもあらねバ遠近をたづねもとめたまふといへりこのゆゑに彼真弓ハ豊嶋の籏を合谷へ献

じて奥方に身を近付それより仇を打んといふ機密をかたる宮奴等ハ父が腹心の家臣なりさらバ真弓ハ何者ぞこれなん武藏の一の宮氷川明神の神祇宦渋谷典膳といふ者の娘にて於道とその名を呼れしが父典膳ハ勢ひつよく社領もあまた有のみかハ此頃當社ハ京家にて崇信大かたならざるゆゑ多く宦領の命をおそれず元来邪悪をすることなけれバ宦家貴族にへつらはずまたよく武道に通達して野武士山賊の類ひを破りて軍慮にもほまれあり里人これをうやまふて領主のごとくもてなすよし」14 合が谷にハこれをいかりて不意に軍兵をさしむけられ逆反の者と云ふらしたちまちこれを打亡し終に所領を奪はれたりこの時於道ハ九才にて母もろともに其場を逃去麻嶋の親族塚原何某の方にしのびその家なれバ神職の業ハ母より傳來し六門退甲の軍術劔法ハ彼地の名家に随身し十五才の節より大志を起して諸國をめぐり術をはげまし今年こゝに十八才さも惶しき勇婦なりさて宮奴等ハ錦の簇の由をつばらに聞終り今にはじめぬことながらお道が記臆に舌を巻くだもまくなる酒機嫌神酒も供物も尽たれバいざと三人立あがりていづくへ行や木下闇蔭くらまして立去りぬそれハさておき別説同じ夜路を本幸に越行駕籠の」有けるがこれに附添一人の女前へ廻りて棒鼻を両手にしつかと押もどし「コレサ〳〵駕籠やさん急ぐばかりに氣を取れて倶にこゝまで走つて來たがよく〳〵看りやァ丸山だノこれじやァ芝浦金曽木へハ南と西の方角遠辻駕渡吝をして居ながらこゝらの道が不案内か知らずハわしが前に立棒ばな取て引もどせバ駕籠をどつさり下し置「ハ、、、、さすがにそれと氣が付たか。ドレそんならバこの道へかゝつた理をきかせやう」今一人「コレマアよく聞なョ芝崎から浅草へ通ふが順の此方等を無理に雇つた逆戻し「ヲ、それ〳〵冨士の社の拜殿からはやく〳〵とせり立てものさへいはせぬ此美婦人盲が駕をかついでも考をつけるあら仕事まだそればかりか姉御のふところ」15 餘分もあるめへ四五十両たしかに見こんだ山越ハ女だてらに美味過る仕業を一人でさせめへと思つて仕組だ棒組の智恵で此方へ礫川娘をはめる上得意があるから其処へ遣るつもりだ否だといへバ懐の金まで始末を付やうと今まで隠言語で途中談合しかしそれじやァ此方等も「少し酒代が取過てどうやら無慈悲なこゝろ持それゆゑ利德を半分に仕やうといふも佛生金をよこすか娘を渡すか思案して看てどちらでも勝手な方を返事をしなァ棒組是じやァどうか隠便すぎて「されバサ氣のいゝしかただが相手が女のことだから安目を賣も當世かへドレ一ぷくふかすべヱト木の根に尻をかけながら傍若無人の大言に忙れはてたる彼女しばらく答もなかりしが」何かこゝろにうなづきて「なるほど〳〵詮方がねへどうで元手を懸たといふわけでもねへから了簡して其方達も半口載せやうそうして見りやァうろたへて逃まはるにもおよばねへたのんで乗せた女の出所も明して何かの相談を「ヲット其所にハ如在ハねへこの棒組ハ多塚生れ姉御の名前も娘のことも先刻に兼知してゐやす「ヱ、ナニ

多塚の「▲ハテ姉御の名ハお張さん娘といふハ神宮屋の一人ッ子でお袖といふ色娘どうだ少しも逡ふめへ「●それまで云やァ軍よかろうサァ引出した様子ハどうだナ其塩梅で始末をつけやう左様じやァねへかト大胆不敵そも〳〵これハそのころほひ湯が嶋本郷の辺りに徘徊してよからぬことのみたくむなる三六重八といふ」[16] 曲者なりかゝる両個の破落戸的に右左りから詰寄られ「▲ハテうち明てはなして見りやァ手軽いわけだマア聞ナ多塚者なら知つてもゐやう庄屋の家内に梅太郎といふ小奇麗な若衆ッ子が存たッけあれをこの子が執心してはまりこんだ娘の一途いろ〳〵居膳して看ても思ひの外な野暮息子で箸をもとらねへのみならず何処へ行たか知れねへ旅立それから朝夕泣くらすその執着をおとりにして何ぞ能とりの掛やうがと思案してゐる軍中へかねて知己の判人が婦女の美麗のがあるならバ大磯の親方で金ハ望みの通りに出るといふから風と氣が付てあの子をだましたこの狂言路用が出来たら鎌倉か上州かハ知らねへが是非梅さんを尋出して」逢して遣ろうと進めこみ盗み出させた五十両それから連出す工面をとおもふ矢さきへ湯が嶋の冨士の湯立の大評判その見物と親達まですかしてあの子ハ引出したがぐぢ〳〵してハゐられぬ目筭追手の懸るも氣がゝりなりどうで一度ハぶちまけて泣せる身賣をゆる〳〵とするでもねへとおめへたちをたのんで芝浦金曽木の心易い所までと思つて來るハ來たものゝおめへ等がそれほどに見込だからハ愚智もいふめへ肩をいれるも活業づく除といつたら喧呰のたねこれから後々相談合手になつたら両為金まうけがあれバいつでも知らせ合ふ好身を結ぶ仲間入と思やァ惜む訳もねへ其かはりにやァ此所から直に夜通しかけて大磯へ棒鼻建場の」[17] 休みをせずおいらも一ト肩助たらバ無にハ増の三枚並何とそうではあるまいかトいへバ三六重八が「●なる程わかりのいゝ姉御だ「▲ざッくばらりに出られて見りやァ初手強もてに遣つてのけたが「●氣恥かしいやら面目ねへノウ姉御氣にさはつたら了簡して「▲ハテ野暮を云なさんな此方ハ氣ばかり強くッても女に生れたかなしさハ何かに付てらちがあかねへどうぞこれから便りになつてなんぞといふもいやらしい色氣ハ捨ても慾氣と喰氣ハ死ぬまでどうも捨られねへ。イヤホンニ喰氣といやァ忘れてゐた湯立の場所で一徳利買た酒さへ人込で逆上てさつぱり呑めねへから急ぎの路の息継に茶のかはりともなるものと思つて捨ずに先剋ソレ」駕籠へくゝしてもらつた酒肴ハなくとも徳利の口から一盃遣つたらどうだろう元氣がついていゝじやァねへか「●そいつハ何よりありがてへそんなら棒組前祝ひにト手を打悦び彼お張ハ徳利を取て両個が前「▲アお近付の為はじめなせへ「▲ヲット來た〳〵遠慮ハいらねへサア棒組ト三六がこつくり〳〵二口三口呑で徳利をさしいだせバ「●ヲイ來た大きにお待兼ト息なし上戸の重八がおのが名の字の重ねのみホ引ウット徳利をさし置けバまた採あぐる三六が手さきふるえて面色かはり「▲アット一声七轉八倒血を吐いだしてくるしめバ「●コレハトおどろく重八

も眼をくらまし五臓より絞るが如き生血をバ瀧なすさまに吐いだし虚空をつかむその」[18] くるしみお張ハ左右を見返りて ヘヲホ ヲホハ、、、、どうだくるしいかへヤレ〳〵大きな罪つくりだしかしたとへの背に腹とやらサ何の三割四割ましで頼む酒手でいゝことを仇強慾からそのざまハ心がらだと往生しや ヘゆだんをさせた此酒ハ ヘ酒ハ子細もねへ酒ヨ今ちよつひりとつまみこんだ毒ハまへからたしなんでまさかの時の用心にと思つてゐたが仕合せと今夜のやくに立たのだ。アハ、、、、ト高笑ひ膽太くもまたおそろしけれ

貞操婦女八賢誌初輯巻之五終」〔白〕」[19]

楊太真遺傳 精製桐の箱入

**處女香** 一廻り 百二十文

そも〳〵此御薬ハ卒朝無類の妙方にて男女に限らず顔の艶をうるはしくして生れ變りても出来がたき程に色を白くし肌目細になる功能あり しかしながら此類の薬 世間に多く白粉 洗粉 化粧水 其外油 薬などを製して皆こと〴〵く顔の薬になるおもむきを功能書にしるしてあれどもその書付の半分も功能なし依之 此御披露を御覧じても久しいものゝ弘口上などゝ看消なし給ふべき事ならんがこれハなか〳〵左様に麁末なる薬にてハこれなく只一度用ひ給ふても忽ちに功能の顕れる妙薬なり一廻り用ひ給ひてハ御顔の」色自然と桜のごとくなり二廻り用ひ給はゞ如何様に荒症の肌目も羽二重絹のごとき手障りとなるのみならず○にきび○そばかす○腫物の跡○しみの類少しも跡なく治りてうるはしくなる事請合也○朝起て顔を洗ひこの玉粧香をすり込たまはゞ些も白粉を付たる様なる気色もなく只 自然 素兒の白くうるはしき様になれバ娘御方ハいふに不及年重し御方が用給ひても目に立ずして美くなる製法ゆゑ御疑ひなく御用ひ遊され真の美人となり給ふべし　　為永春水精剤

髪の艶を出し 妙薬 初みどり　　このくすりハ髪を洗はずにあらひしよりもうつくしくなる　代三十六文

髪垢をさる　　こうのう有

所弘賣

書物并繪入讀本所　江戸數寄屋橋御門外弥左エ門町東側中程　文永堂　大嶋屋傳右衛門」丁付なし

【広告】

# 貞操婦女八賢誌初輯卷之六

江戸　狂訓亭主人著

## 第十一回

勇美姉妹會卒郷山
為盟友青柳爭錦簇

此時於袖ハ駕籠の中にて重八三六於張等がたがひに告る非道の談合つばらに聞てあきれはて我をわすれて居たりしがこれぞ色情に惑ひたる不孝の罪にて斯までにあざむかれしかと後悔しても身儘にならぬいましめの縄目のみかハ猿轡もだへ〳〵てありけるが彼三人が酒くみて語らふいとまにやう〳〵と口を割たる手拭を命に」かけて食さきつゝふりほどいて下せし垂をあなたへと轉びいでたる戸なし駕籠いましめられたる縄のまゝ逃んとするを彼方よりちらりと看止る悪婦ハかけより帯背を採て引もどし　張「コレサ〳〵お袖ぼう余斗なことをせずといゝはな逃て何処へ往つもりだアハ、、あれ見な大の男でさへ手もなく押かたづけるお張さんだぜわるく世話をやかせるとおめへをもあの通りにしてしまふョ。ノコレ梅太郎に逢たくハ勤をするが近みちじやァねへか命有てのものだねだ女郎にでもなつてゐりやァめぐり合こともあらァふたゝび三方大塚へハ帰らねへといふ人を待てゐられるものでもなしまた遊女でもして看なせへ梅太郎ぐれへの男ハ」[1]毎晩抱て寐られるぜ。ヱ、コレサコウ他にばかり口をたゝかせずとも返答をしねへのかなるほどそうでございますとかどうしても否だとかいふいゝ否だといへバ口を割て此酒を呑せる

かしめころすか二ッに一ッ押かたづけて骨折損のくたびれまうけにハ五十両でふせうしてこれから何所ぞへ巣を替るぶんのことだサア駕篭があつてもかきてがなし詮方がないから氣の毒だが夜通し芝浦金曽木まで引ずりながらも往にやァならぬとあくまでお袖をあなどりて小児のごとく取あつかひまたも手ごめになさんとすれバお袖ハこれをふりはらひ身をのがれんと右左りあせれどかよはき處女なりこなたハ男にまされる荒もの忽ちお袖を」引たふし〽ヱ、いま〳〵しく性のこはい女児だこれよく聞なこれまで神宮屋へ出這入しておめへさまの御持佛さまのと空礼拜をしてゐたのハ始終仕業をしやうばつかり全躰今日までべん〳〵と時刻を延して居るといふも思ひの外に用心深く奸智たけた夫婦の氣質それゆゑ月日を過すうち梅太郎の一件からやう〳〵こゝまでこぢ付たのだといつたところが聞わけてなか〳〵すなほに往もしめへサア意地張りやァ斯だぞとおどして無理に得心させ身をうらすべき内心只さへ乱れし黒髪をむしりちらして片手を握り打すゑねぢすゑさん〴〵にさいなむ非道のお張が強欲お袖ハくやしさかなしさに聲を限りと叫べ」[2] ども人里遠き丸山のたれかハこれをすくふべき既にお袖ハ秘穴を打れてアット絶いる時しもあれ木立の蔭よりお張を目がけ打出したる礫の眼つぶしねらひたがはで両眼より火の出るばかり打當られくるしき聲ともろともに尻居に動と倒るれバ木立をめぐりてしづ〳〵とあらはれいづる一個の美人今照わたる月も羞て雲にや入らんその顔色練絹の帽子を額に當秋の七草を加賀染にせし金巾木綿の振袖を着て大紋尽しの帯を結び浅黄の絹の甲掛脚半を着紅の縮面の湯巻をなし裾をバ高く引上つゝ草鞋の紐をしかとはきしめ左手に管笠右手に杖旅行姿と見えながらやゝ〔ママ〕しくもまたりゝしけれ時に」お張ハ氣をはげまし只看れバ礫を飛したる敵ハこれかそもいかに二八あまりの處女なりいぶかしながら由断せず立上らんとするところを又も打出す手練の小石ふたゝび高面にうち付られ顔をおさへてよろめくひまに處女ハ飛鳥のかけるがごとく踊りあがりてお張をバたちまち草辺へ蹴たふして見むきもやらず草邑に倒れしお袖を抱おこし延齢丹をあたへて呼生ながら〽喃妫氣をたしかに保いのうお袖やァ引イト聲高く呼立られてやう〳〵に蘇生たる彼お袖その身を介抱する人の姿を見やりていぶかしく淄息ついて言葉もなし心をしづめてよく看バ宵に浅間の火焚家より立出て両個の宮奴に蜀江の錦の來暦を」[3] かたりし神女によく似たり其時お袖ハ拜殿に在てくわしく聞たれども身ハいましめの縛り縄猿轡さへはめられたればもの云こともならずして眼前ほしき錦の簇をもとむることもならざりしが今斯近く介抱され我身のことより梅太郎がためにぞ懸念豊嶋の重器處女はお袖にむかひていふやう〽心がたしかになつたのかへ〽ハイ〽さぞ合点のゆかぬことゝおもふであらうがわたしハ其方の姉じやぞへ〽ヱ、〽ヲ、おどろくハもつともだが所は多塚家名ハ神宮屋たしかにそれとハ先刻にから立聞して知つたれど猶くはしく

【挿絵第五図】

とおもふうち駕籠やが毒酒にあたるまでなかなか手強き悪婆の奸斗すでに其方も危ういやうになつたに依て助命」【挿絵第五図】」[4]たがよもや覚えてゐるであろう神宮屋といふハ養父母そなたの実の爺さんハ氷川の神職典膳さまであろうがの〳〵アイ相逮もないわたしの実親そうして見れバいよ〳〵おまへハ〳〵姉にちがひハないはいのう〳〵おなつかしうございます〳〵とハいひながらまだ疑ひのはれぬ心と見えるはいのそも〳〵そなたハ爺さんの妾腹母御の亡後神宮屋の養女となつたといふことを風のたよりに聞たれど間もなく古郷氷川の大変親類一族ちり〴〵になり行中に此身も子ども殊にわたしの母人とハ不和なそなたの母御のことッイ音信もせなんだが血すぢの縁ハ切ないと見えて今夜のこの難義姉がすくふもふしぎの再會たとへ母とハ敵同志といふても一ッ爺さんの種にかはらぬこと」[5]じやゆゑまさかに命の際となる難義を見てハ捨られずこの介抱をするのじやぞへまだ得心がゆかぬかへトいはれてお袖ハ顔あからめ〳〵ェ、それでハちがひございませぬ日ごろ戀しい〳〵とおもつて泣ておしたひ申たお姉へさんでございますかまことにうれしいこの様子。夢でハないかと存じますョどうぞこれからわたくしの力になつてくださいましトうれしきもまた涙なり處女も涙にくれたりしが其身の念願合が谷を父の仇としねらふことそのゆゑに姿をかえて奇術をほどこし神卜仙女真弓と名のる子細を落なく物語れバお袖も今宵の難義をはじめ恥らひながらも梅太郎がことをつゝまずうち

あかし真弓の所持する錦の籏を彼梅太郎に送りあたへて古主君」たる豊嶋家へさゝげて立身なさせん趣をひたすら姉にかきくどけど真弓ハこれを聞いれず〳〵のうお袖七年八年へだゝりてめぐり逢たる妹の願ひ聞いれぬハ無どくしんと姉を恨むであろうけれど今ハやられぬ錦の籏爺さんの怨みをはらし合が谷どのを打んにハ願ふてもなき大事の品恨ある人を討て後梅太郎に渡してやるまづそれまでハ此姉が借て卒意をとげると云や〳〵袖ごもつともでハございますがその籏が鎌倉へ参るやうだと梅さんばかりか多塚のお竹さんといふ子の家名も杢兵衛さんの落度じやゆゑたゝりが有と聞ましたならふことならその御籏を〳〵真ほしいといやるも尤じやがそれでハ男の爲ばかりたとへバ腹が逡ふても血脉ハ同じ爺さんの仇をうたせてこの」[6]姉に孝行させる心ハないか其方の爲にも実親の敵は討たずと戀しいとおもふ情男が立身して添とげさへすりや宜のかへトいはれてお袖は理にふたゝびかへす言葉もなく涙とともに伏しづみしがやう〳〵に顔をあげ〳〵袖あやまりましたお姉へさんもつたいないが爺さんの敵を打といふことハ女の子にハ出來ないものとおもふばかりか八才の歳弁まへのない時のことッイ遠ざかつてわすれた同前実の爺さんのことをわすれたといふ其いひわけにハどうで返らぬ多塚を戒名の塚と覚悟して草葉の蔭の爺さまへお侘を申上まするトいふよりはやく介抱の時にとかれしいましめの縄を梢に投掛てくびれ死なんとなしけれバ真弓ハこれを押とゞめ〳〵真聞わけのない子でハ」あると叱るところをしかるまいそなたも私も父母にわかれた不幸といふ中にもかよはい其方氣随な此身とても角ても面々の生質浮薄な色といふでもなし養親のいひなづけといへバかはらぬ夫婦中夫と定める其人の行衛をしたふ志　錦の籏のことまでも思ふ所存ハ操のきどくなか〳〵にくいとおもひハせぬ其方の願ひもわが身の望みも宜両全の斗略ハテどうがなと胸に手を當て思案にくれたりける此時しも青柳ハ梅太郎の頼に依杢兵衛が家にお竹をあづかりしばらく多塚にありけるが今日ぞ湯が嶋卒幸なる冨士淺間の社頭において湯立神事を興行して白日昇天の風聴あり殊に仙女真弓といへるハ沈魚落厂閉月羞花実に絶」[7]世の美人なりと聞えしかバいよ〳〵奇しきことに思ひ心にうかむことあれバ今朝しも多塚をいでたるに於斎の尼の密事をうけて竹の塚までいたりしが思ひの外にひまどりて小岩原にかゝりしころハ日のくれはてゝいと淋しく常の女子であらんにハ心おくれのあるべきに大丈夫にまされる剛氣なれバ夜道をいとはで山越に長井の堤を南へかゝり本幸臺へぞ來りけるこゝに真弓ハ英雄の心も弱る女の情妹を不便に思へハやいかゞなさんと猶豫うちいつの間にやら氣絶せしお張ハそろ〳〵伺ひより真弓の所持する懐中の御籏をさつと引出せバ其手をとつて捻返し戻りうたして投いだせバ御籏ハさらりと解ほどけ月に赫く錦の光りお袖ハ思はず聲たてゝ〳〵袖それぞ豊嶋の御家の宝　〳〵真弓織」いだしたる雲に竜　軍の節に押立れバ潜龍　昇天の勢ひありと噂にたがはぬ蜀江の

〳〵錦の籏にてありけるかト聲かけられて真弓ハおどろき振向うしろに青柳ハ籏をとらんと飛かゝるをりしも忽ち雲閉て月をかくせバいとゞさへ茂りし森のくらがりとなるのみならず足元ハ木の根岩角凸凹の切所難所にありけれバたがひの働き自在をなさずかよはきお袖も彼籏を。やはか他人に渡すべきと心をはげまし立かゝり姉に方人なさんとすれど闇路となりしことなれバ敵も味方も差別かね右よ左りと争ふひまお張ハまたも這起て倶に窺ふ錦の籏それとも知らず青柳が丁ど踏出す足前にまつはるごとく邪广となれバいらつてけかへす早足の當秘穴をけられて即死せり」[8] 真弓お袖ハ此音におどろき案ずる姉妹ます〳〵くらき木下やみ木立をめぐりていく度か摺逮ひたるそば道をそれとも知らで真弓とお袖行合はづみ突あたり柔術練磨の真弓の體堅只の處女のお袖が身ハこたへなけれバよろめきつゝむざんなるかな左手の谷へ生死もしれず落たりける折から月ハ光々と雲間をいでゝはれわたり木の下かげも明らかに照せバ真弓ハ青柳と兒見合せて驚天し〳〵さてハ妹ハあやまつて深谷へ落たかいたはしい〳〵其方ハ戸田の乗合でトいふを聞ども真弓ハこたへず籏を忽ち巻おさめ荊の薮へ飛入てはやくも影をかくしけり跡追甞なバとめらるべきが容易の敵にあらざることを心に知れバ青柳もしひて遠くハ追ざりけり必竟お袖が生死ハいかに巻をかさねて分解すべし」

## 第十二回

救於竹青柳戦田野
烈勇於亀赴相模路

再説青柳ハ卒幸丘をうち越えて多塚へとぞ急ぎつゝ心につら〳〵思ふやうおよそ浮世の行躰定めがたきが常なれど斯こそとおもふ其ことハ皆こと〴〵くくひちがひてはからぬ業こそあやしけれ義を結んだる梅太郎ハ籏の故にて旅の空今なほ何処と在所も知れず尋る者にもあらざりける我眼に甞る今宵の出會さりとて籏を看ながらも取損じたるのみならで因あるべき田舎神女ハ戸田の渡しに同船なして倶に満化寺にハいたりしかど彼ハ奇術に蔭もなく我ハ於斎の尼の爲に宿因の結びをなし身を立べき祥をバきけど」[9] いまだその時節はやくして同志の集會はかりがたししかりといへども彼神女とハ再度の對面せしかひなく梅太郎のたづぬる錦の籏を争ひて敵とぞなりぬまたそのをりしも同じ籏を取んとせしハたしかに神宮屋のお袖に似たりかれも梅太郎が由にこれをいどみてありけるかもししからんにはそれゆゑに深谷へ命を落しけんいといたはしき處女にこそと思ひつゞけて行道も下つ上りつ礫川裳裾を濡す苔清水右に廻り左りによぎり今亡人となりもせしかと思ふお袖の後世願ふ極樂水を南へさして多塚の里近く來つはや二町にたらざりし枕の林を過る折しも喘息〳〵て來るものありしが路せまけれバ青柳と丁度行合兒見合せ〳〵鍬八どのか〳〵青柳さまか」これハ〳〵ト汗を拭ひ淄息つけバ青柳ハ〳〵マア今時分片息に周章て何処へ行のだへ

鍬〳〵ハイ何処へといふて當処もなく退れて此所まで參りましたがおまへさまに逢からハおさしづまかせにいたしませう〳〵ハテ合点のゆかぬそなたの言葉退れて來たとハ何ごとか家内に變でもあるのかへ鍬〳〵されバサおきゝなされませ近ころお役に付しやッた戸塚大六といふ意地わるどのが大勢の家來衆を連てござつて家内中をしばりちらしてやかましく旅へ行れた旦那どのが鎌倉へ密通したとか内々をやらかしたとかで定めて宅に隠れて居るに相遠ない白状しろと家内を打たゝかれて責られても一向しらぬ家内の者泣て侘てもきゝいれなく領主を権に戸塚どのゝ小者まで力身まはつて文庫」[10]倉をも押ひらき旦那をたづねる風情をして私欲をはたらく非道の仕方あまつさへお竹さまを縄かけて役所へつれるとむつかしさ皆残りなくしばられる中で私のみ逃出してハ済ぬ義理とハ知りながら一人ハのがれ此事を他に告ずハ片手打無理も領主の勢ひで杢兵衛さまの落度となるも知れぬことじやと氣が付てマア何ともなく逃出しましたト面目なげなる鍬八が額に汗をひからして地にもむぐらんありさまなりこれを聞より青柳ハ胸をたゝいて仰天し〳〵そんなら家内がしばられて於竹さんも役所へ捕はれ〳〵いたはしいと思ひましても私等が手際にいかぬゆゑ〳〵かなはぬまでも助けずハ梅太郎さんにたのまれた甲斐ないのみかお竹さんもさぞ恐ろしくかなしかろう殊に新宦の」大六は姪行非道の曲者ゆゑ領主を立に私欲を奸計支配の人を悩ますとかねての噂に遠ひもあるまいたとへ地頭の威光じやとて家主の甿守に小女までいましめて行法があらうか。ドレ走付て兎も角も甿守居にたのまれおめ〳〵と手を束ねてハ言わけがよし有にもせよさし當る於竹さんの大難をすくはにやならぬト鍬八をいそがし立て家に帰れバ既に家財を取上る手配さだめて爰かしこに軽卒等が張番したり是を見るより青柳ハはやおそかりしと氣をいらち又外の方へ走出て見れバはるかに松火を振照しつゝ数多の組子一人の小女を引行さまなりこれぞお竹と見てけれバ鍬八にさゝやきて何処へかしのばせやりその身ハ懐劔取いだし小褄を高く取」[11]上ながら横筋向ひに走いたりて見れバはたしてお竹をいましめさも情なく追立行その行躰さらに公叉ならず非義無道とハいはても知れたり青柳つら〳〵思ふやう斯る邪見の雑卒等に對して道理を述たりともいかでか聞わけくれられんやと有て家財もお竹をも故なく役所へ取上られしと後梅太郎に言るべきか大事をかゝへし身なりとも今此时にすくはずハ他の笑ひとなりぬべし命を的に助けんといと大膽にも懐劔を振ひらめかして踊りいり前後に當つて追立れバもとより覚悟のあらざる雑人伏勢ありとやおもひけん厳重なるにハ似もやらずみなちり〴〵に逃散バなんなくお竹をすくひ出し縄切解バお竹もおどろき物**【挿絵第六図】**」[12]いはんとするを聞もせず耳に口寄せ鍬八が忍びし方へ落しやりその身ハ直地に多塚の宅にかへりてお竹が爲に金銀をたづね出し身を隠さする介になさんと路引遠へて多塚村へ走出したる左手の薮より投いだしたる鍵縄に引かへされて倒るれバたちまち出る数多の組子中

【挿絵第六図】

にも戸塚大六は扇遣ひに笑ひをふくみ聞しにまさる青柳が美質をよろこぶ好色者〳〵手荒くいたすないたはれトいひつゝこれを引立させおのが邸宅へかへり行此夜同所の神宮屋にハ處女お袖が湯が嶋へ湯立の神事を拜せんとてお張と倶に出行しが其夜になりても帰り來ず終夜彼是待わびつ幾たび小者を走らして便宜を聞ども露ばかりその音信を聞よしなくとかくする間に夜ハ」13明たりいかゞせしぞと談合するに下女お鍋ハお踏にむかひ〳〵おかみさまへなんぼお人をつかはされてももうお袖さまハお帰りなさる氣づかひハございませんョ〳〵ナニ〳〵お袖ハとても帰らぬとなぜそれほどのこと知つて昨夜から無云て居たはけな女もあるものだサア帰らぬわけをはやく云や〳〵ハイしつかり知れませんから昨晩ハ申ませんが今朝までお帰りなさらぬゆゑいよ〳〵それに遠ひないと存じて申出しましたトこの程お張がすゝめによりて梅太郎の跡を追ひ家出なしたるにうたがひなく梅太郎も李兵衛の家にハたしか居らざるおもむき隣家なれバお張が作畧合圖なせしことならんとくはしく告れバ彼お踏も実かとこれにこゝろ付き家内を見れバお袖が着替の」衣類も多く紛失して金も不足なしたりけれバさてハ男の跡をしたひ出行たるに相遠なしまた梅太郎も歳齢なり李兵衛とても仮の親心にかなはぬこと出來てお袖に金を掠め奪はせ連だち逃たるものならんまづ李兵衛が宅に人を遣りて梅太郎の行衛を問はせよ一人ハお張が許に行てこれも家内を詮鑿すべしと評義とり〴〵なるところに昨夜の噂さま〴〵

にて戸塚大六の自身人数を連られて夜深に杢兵衛の宅を闕所し家内のこらずからめ取梅太郎の行衛も詮義ありしに久しく病気と云しハ偽り実ハ以前に亡命せしか昨夜のさはぎに出合ずこれ穿鑿の寂中なりまたその家の食客に青柳といふ處女ありしが女に似氣なき働」[14]していましめられたるお竹をすくひ何処へか落し遺りて猶のがれんといとみしかどその身ハかへつてとらへられ獄屋へ今朝ハつながれたりされども容兒よき娘なれバ大六ぬしの心にかなひ頓にゆるさる沙汰もありと実 啌云我知り顔にきそひてさへずる百千鳥かしましくこそ風聴せり神宮屋夫婦ハ此事を聞ていさゝか心地よくお袖も実の子ならねバ思ひの外に歎きもせず杢兵衛の家を怨みとすれバ大六の許へ金を送り此度のことを幸ひに梅太郎を罪に落したとへ古郷にかへるとも當所に住居ハさせまじと種々に讒訴をかまへしとぞ話 分両 頭こゝにその頃石濱の里に舞子於亀といふものあり元ハ真間なる郷士手古那の三郎といふ人の秘藏の」處女なりしが舞子になりて世を渡るハ父なき後のことなりけりそも〳〵此子の薄命なる當才にして母にわかれ十二才にて父を死去いと〳〵哀れな生立なりお亀が母ハ千葉の浪人利根の七郎といふ者の娘勝美といひけり七郎夫婦零落して諸所に流浪し真間の在所にありけるが父七郎ハ世を去て母子活業もなかりしを手古那の三郎云よりて深く勝美を戀ひしかバ母も子細を物語り母子が命をつながん為に三郎に勝美を委ね世にかこはれ女とかいふごとく手古那の厄介となりけるが勝美は原来烈婦にて其身女と生れしをいとくちをしく思ひつゞけ我もし男子たらんにハ母をやしなひ身をおこし家名を立る」[15]時節もあらんに彼白居易の言葉のごとく百年の苦樂他人に寄[ママ]女の身こそ悔しけれとその身を深く恥らひけりかくて勝美ハ十九才のとき三郎が種を出産せしが玉のごときの女子にて三郎がよろこび大かたならずされど勝美ハよろこばずせめて男子をうみいださバ末頼母しきことならんに卒意なきことゝ歎きけりかゝる勇氣の女ゆゑ萬の業にこゝろをつかひ終に産後の悩みとなり医療の手當を盡すといへども漸々に弱りゆき乳房も細りて出ざりけれバ里をたづねてこれをあづけその身ハ十九才の正月の中旬お亀をうみて引つゞきたる大病なりしが一年ちかくわづらひてその十月の下旬木枯し寒きそのゆふべ」はかなく此世を去りしとぞさてまたお亀を里にとりし石濱の今吉といふものあり彼は京都の出生にて白拍子の親方なりしがこゝにうつりて久しからず妻のお花が出産して子をうしなひ乳にこまりてありけるゆゑ幸ひお亀を里にとりていとをしみつゝ育しがある夕暮に於亀の母親勝美がたづね來りしかバ今吉夫婦ハ出むかひ「ヤレ〳〵マアおまへさんハ久しい御病氣でおいでなされたのによくお出なされました子へ「勝ハイすこしよくなりましたゆゑあの子に逢のをたのしみにやう〳〵のことでまゐりました「花ヲ、〳〵そうでございますかマア〳〵こちらへ〳〵「勝ハイ〳〵おかまひなさいますなわたしハたゞお亀に逢ふのをこゝろ」[16]がけて「花御尤でございます今乳呑で

すや〳〵とねむるところモウ〳〵此間ハたいそうにかあいらしくおなりなさいましたたとへおまへさまがおこゝろよくなつたとて急におかへし申すことハなりませんどうぞさうおもつてくださいまし達てお亀ぼうをつれて往ふとおつしやるとわたしハ死んでしまひますマア二三年ハわたし等がどうしてもおそだて申ますからその思しめしで今日もマアちよつと抱たらそれ限に〳〵イヱ〳〵どうしてそのやうな取返すの何のといふ氣ハすこしもございませんおまへたちが否だとおいひでも出産してからの御丹誠母のない児とおぼしめしてするゞ〳〵までもかはいがつておくん」なさいョマアどうぞはやくあの児の兒をお見せなさいなどんなになりましたか案じられてなりません〳〵さぞ〳〵さうでございましやうサア御覧じましこのやうに大きう成てゞございますト抱き起していだかする里の母親実の母おかめハこれを知るよしもあらざるべきにこハふしぎや勝美が抱バたちまちにさもかなしげに泣いだす聲ハ赤子に似もやらで哀れをふくむその形勢今吉ハ風と次の間より勝美を見れバ何とやら影うすくしてそう〳〵たり勝美ハおかめを抱あげてゆすりながらの子護唄ねん〳〵ころよ念ごろにをさなき兒しみゞ〳〵とうち詠めてハむせかへりさも哀れげに看えけるが今吉夫婦ハ火ともし」[17]ごろ前後片寄せ湯をわかしせめて煑花の山茶でもと馳走ぶりなるはきそうぢをさな子抱せしその儘に勝手の方にて立つ居つ雨戸を繰などする中に勝美ハ傍をわすれし風情〳〵ウお亀ぼうや母ハモウこれ限で逢こともならないョ顔をおぼえてゐてたもやといふもいはれぬぐわんぜなさかひない業と知りながらもあきらめられぬ恩愛のきづなも縁も今きれてはかない母の定業ぞそなたハどうぞ似もやらで立身出世をしてたもや母にはなれてまた程なふ爺さんにも薄い縁これまで知らぬことながら業通ゆゑに今知つてなほさらいとしいそなたの行すゑ此家の爺さま姥さまを大事におもふて成人」しやたとへ女の子にもせよ爺御ハ手古那の三郎どの母の素性ハ利根の七郎両家の繁栄ハ其方の一心この身も草葉の蔭よりしてちからとならふ左様思やトいふを聞とる今吉が〳〵何おつしやるやら母御さまたしかにあなたのお歳ハ十九厄年ゆゑに少々の御病氣ぐらゐハ是非ない御難義それじやといふてお若い御元氣モウこれからハ漸々にお肥立なさるを待ばかりそのお児さまの壮健さ直に水際立やうに成長おなりなされます全躰貴嬢ハお氣の結ぼれそれがこうじて御大病と兼てもお聞申ましたちつと浮〳〵なされまし〳〵サアその成人を待こともならぬ冥土と娑婆の縁今宵にかぎる憂おもひ〳〵そんならあなたハ御病氣で〳〵どうやら哀れな」[18]その御様子〳〵もしや此世をト右左りすがるお花にをさな児を渡してしほ〳〵立姿門口いづると見るうちにぱつともえ立一團の鬼火と倶に消うせて門の松風そう〳〵といとさみしくも初夜の鐘今吉お花ハ顔見合せすごき中にもいぢらしく其夜をかたり明せしに翌日勝美の死去りし由を真間より告來れバお花ハまさ〳〵幽灵の別れを惜みし愛憐の深き歎きをつく〳〵と思ひやるさへいた

ましく実の子よりも大切にあはれみかしづきそだてけるが母にもまさる美麗の姿ことに才智の勝れしゆゑ実の爺親三郎の寵愛いはんかたもなけれど卒妻真柴が心をかねて猶石濱にて育けるにお花ハ舞の上手なれバなぐさみながらお亀に教へて今ハ」お花もおよばぬほどに其妙手を極めつゝ十三才になりしころ父の三郎横死をなして遺憾の心止時なく亡母勝美の氣を請たれバいさゝか憤然たる情態ありて男子に等しき勇をこのみ父の敵を討んとねがふ念慮怠ることもなく十五才の七月下旬その手がゝりのあるをもて里親達に頼みこしらへ鎌倉さして登りしが此節神宮梅太郎も錦の旗のゆゑによりまた相模路へおもむきしとぞ必竟お亀の父三郎いかなることにて變死ハとげしぞ敵といふハ何者なりやそハ十三回の條下に綴れり第二輯を讀て高評あるべし

貞操婦女八賢誌初輯卷之六終」19

【後ろ表紙】